

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2008年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学 研究科	史学 専攻
指導教員	所属・職名	氏 名	
	文学部 教授	浦野 聡	印
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	18世紀イギリスの国制改革とインド統治		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	文学研究科 史学専攻 博士後期課程 2年	鹿野 美枝	印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
研究期間	2008	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、1780年代後半から90年代のインド統治改革を、同時期の国内政治潮流と連動するものとして多角的な問題構成において把握しようとするものである。

イギリス18世紀史やイギリス帝国史において、インド問題とは、東インド会社利害を中心とした東インド会社問題と、1784年のピットのインド法成立をもって説明されてきた。本研究は、本国におけるインド問題策定の中心人物ヘンリー・ダンダスと、インド総督コーンウォリスに関する史料調査を通じて、1784年インド法以後の80年代後半から90年代に、国内政治問題としてのインド問題が、いかに実際のインド統治に適用されていったのか、という点を明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[イギリス国制改革] [インド問題] [ヘンリー・ダンダス]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、18世紀末イギリスのインド統治改革に着目し、それが同時期ロンドンの政治家たちにも注目されていたことをふまえ、国内でのインド問題に関する政策の中心人物ヘンリー・ダundasを中心とした本国政治家の書簡を中心とする文書史料の調査を実施することで、本国政治上の重要人物によるインド問題の関与を実証的に明らかにするものである。そのために、以下のような国内・海外での各調査を実施した。

1. 国内調査

国内調査は主に、図書購入と国会図書館所蔵資料の印刷により研究文献・史料の収集・精読をおこなった。これによる(1)研究動向の把握と(2)史料分析を以下にまとめる。

(1) 研究動向の把握

ヘンリー・ダundasに関する既存の研究は、①伝記的文献と②ある側面に着目したより専門性の強い研究文献・論文とに大別される。まず、各研究で代表的な文献・論文を以下にあげる。

①伝記的文献：

- Holden Furber, *Henry Dundas, first Viscount Melville, 1742-1811: political manager of Scotland, Statesman, administrator of British India* (OUP, 1931).
- Cyvil Matheson, *The Life of Henry Dundas, first Viscount Melville, 1742-1811* (Constable, 1933).

②研究文献・論文：

- John Dwyer; Alexander Murdoch, 'Paradigms and politics: manners, morals and the rise of Henry Dundas 1770-1784'. In Dwyer, John; Mason, Roger A.; Murdoch, Alexander (ed.), *New perspectives on the politics and culture of early modern Scotland* (Edinburgh, 1982), 210-48.
- Edward Brodus Jones, *The Imperial Ideals of Henry Dundas and British Expansion in the East, 1783-1801* (University Microfilms, 1970).
- Michael Fry, *The Dundas Despotism* (Edinburgh University Press, 1992).
- Alexander Murdoch, 'Henry Dundas, Scotland and the Union with Ireland, 1792-1801'. In Harris, Bob, 1964 (ed.), *Scotland in the age of the French Revolution* (Edinburgh: John Donald, 2005), 125-39.
- Mackesy Piers, *War without Victory: the Downfall of Pitt, 1799-1802* (Clarendon Press, OUP, 1984).

ダundasのイギリス史一般における第一のイメージはスコットランド政治の大物であったという点にある。しかし、上述の主要研究文献だけでは分かりにくいのが、ダundasに関する研究は決してスコットランド史に偏ったものとはいえず、どちらかといえばスコットランド出身を背景にロンドン政治経済界で活躍していたことを示している。このことは、多様なダundas史料を駆使し、スコットランド、ロンドンの政治利害、インドなど各分野・側面を偏りなく詳述している①伝記的文献によるダundas研究の貢献が大きい。

(2) 史料分析

国内調査においては、国会図書館が所蔵するダundasに関する刊行史料集の印刷・分析によって実施した。史料集は次の二点である。

① *The Private Record of an Indian Governor Generalship. The Correspondence of Sir John Shore, Governor-General, with Henry Dundas, President of the Board of Control, 1793-1798*, edited with an introduction and notes by Holden Furber (1933).

② *Two Views of British India: The Private Correspondence of Mr. Dundas and Lord Wellesley: 1798-1801*, edited with an introduction by Edward Ingram (1970).

この二点はダundasが Board of Control (以下BOC) の長官を務めた1793年以降の①1793年から98年のインド総督ジョン・ショア、②1798年から1801年のインド総督ウェルズリーとの私的書簡集となっている。この二点がともに私的書簡を扱ったことは、ダundasが公的な会社の書簡よりも私的書簡においてより重要な問題を連絡したことによっている。これらの二点は、既存研究においてもこれまで十分に活用されてきており、1793年のBOC長官就任によってダundasが国内のインド問題策定で名実ともに最も影響力を有することになったことを明示するものとなっている。

研究成果の概要 つづき

2. 海外調査

海外調査は2008年10月16日から29日にロンドンへ渡航し、ブリティッシュ・ライブラリにおいて史料調査を実施した。既存の研究においては、コーンウォリス総督の後継総督であるジョン・ショア(1793年から98年)、ウェルズリー(1798年から1801年)期に比較し、コーンウォリス総督期の国内でのダンドスのインド問題についての実証的な研究は少なく、コーンウォリス改革の末期にあたる1790年から93年のダンドスの手稿資料を中心とした史料調査を行った。

ブリティッシュ・ライブラリでは、史料のタイプ別に閲覧出来るリーディング・ルームが異なり、史料請求と開室時間の都合から調査日程のなかで3つのリーディング・ルームを利用し調査を実施した。利用したリーディング・ルーム別に調査とその成果を以下にまとめる。

(1) マニュスクリプト

マニュスクリプト・ルームは手稿史料を扱い、基本的に滞在期間中は当ルームを可能な限り利用した。今回、実際に調査出来た史料は以下の①メルヴィル・ペーパーと分類されるダンドスの書簡集のうち3巻と、当該期インド史料をおさめた②リバプール、③ハスキソン、④オークランドの三人の政治家の各史料である。

① Dundas(Henry), Correspondence and papers, 1791-1805

Add. 40100:Melvill Papers vol.1, Correspondence with Goerge III.

Add. 40101:Melvill Papers vol.2, Letters from Lord Grenvill. 1798-1801.

Add. 40102:Melvill Papers vol.3, Drafts and minutes etc. 1794-1805.

② Add. 38409:Liverpool Papers vol. CCXX East India Papers June 1782-1801.

③ Add. 38765:Huskisson Papers. Vol. XXXII. India and Ceylon.

④ Add. 34468:Auckland Papers vol.LVII East Indies 1786.

短期調査のため時間的制約もあり、②から④は特に1790年前後を中心に調査せざるを得なかった。調査した全6巻に共通するのは、今回の調査対象とした1790年前後の時期は、ロンドンの政治家にとって最重要トピックは対フランス抗争であったということである。インド問題に関してはインド駐留軍やインド在地勢力との抗争などについて触れることもあるが、これは、大きな視野から対仏抗争の一部ともいえる。しかしながら、上記①メルヴィル・ペーパーのvol.3所収のダンドスの覚書や書簡からは、ダンドスがインド問題のなかで最も注意していた問題はインド負債・インド予算案に関わることで明らかとなった。

(2) アジア・アフリカ、(3) ヒューマニティーズ

アジア・アフリカ・ルームは特にアジア・アフリカ地域の専門性の強い史料や貴重資料を扱っている。当ルームは(1) マニュスクリプト・ルームと同時17時に閉室してしまうため、開室時間の長い人文系資料を幅広く扱う(3) ヒューマニティーズ・ルームに移動申請し(1) 閉室後に利用した。調査した史料の主要なものは、例えば以下のような本研究の同時代史料となるパンフレットのような発行物である

① *Heads of the speech of H.D. in the House of Commons, February 25, 1793, on stating the affairs of the East India Company* (1793).② *George Tierney, A Letter to the Right Honourable Henry Dundas, on the Situation of the East India Company* (1791).

①は下院でのダンドスのスピーチを刊行したもので、②は当時ではよく見られた書簡形式の政治的パンフレットである。①で刊行されたダンドスのスピーチは、インド予算に関するもので、版を重ねて出版されたことからわかるように、当時かなり注目されたスピーチであった。また、②のようにダンドス宛書簡の形式のパンフレットも多数あり、彼がインド問題で非常な影響力を有していたことを示している。

以上のような史料調査から本研究の成果は次のようにまとめられる。

既存のダンドスのインド問題に関する研究では1793年までの実証的な研究はほとんどなかったため、本研究は、93年までのダンドス史料による実証的調査を実施することで、18世紀イギリス史のインド問題を再検討しようとした。既存の18世紀イギリス史のなかでインド問題が1784年インド法制定を中心に解釈されていたが、本研究は、1780年代後半から90年前後までのダンドスのインド問題への関与を調査し、彼とその周辺の国内政治家によるインド問題の関与の実態を明らかとした。